

“美貌”と“健康”を望み通りに手にする方法

## 56. “仕返し”や“恨み”の感情からは何の利益も生まれない！

愛に飢えて餓死する人がいます。拒食症はその兆候かも知れません。

---

拒食症の女性が増えています。進んだ医学でも適切な治療法が見つからないようです。マーフィー博士が拒食症の女性を扱った興味深い実例があります。実の娘が突然食事をとらなくなり、みるみるやせていくのを心配した父親がマーフィー博士に相談しました。

博士は、娘に会わせてくれるようにと言いました。二人きりで会ったときに博士はこう切り出しました。

「君はお父さんを困らせようとしているね」

「そうなの、仕返ししてやるのよ」

彼女の母親は彼女を生むとすぐに亡くなったのです。男の子を望んでいた父親は、再婚して男の子をさずかりました。当然、父親の愛は弟に向けられ、彼女はそのことを恨みに思っていたのです。博士は彼女に言いました。

「今君がやろうとしていることは、自分自身を傷つける行為で父親には何の責任もない。だから、このままやせ衰えてひどい病気になっても、君の目的は達せられないよ」

「そんなことはないわ。お父さんは現に困っているようだし」

「たしかに困っている。しかし問題の解決には少しもならない。それに一番困るのは君自身なんだよ」

彼女は激しく泣き出しました。ひとしきり泣くと、昼食をたっぷりと食べ、以後は拒食症から立ち直ったのです。博士がこの娘さんの気持ちを父親に伝え、父親は娘に冷たかった自分を認め、娘に謝罪しました。博士は言います。

「娘さんが本当に求めていたのは父親の愛なのです。彼女は愛され、大事にされ、必要な存在であることを確信したかった。それに父親が気づいたとき、彼女の心は満たされたのです」

拒食症はほかの何か大きな欠如感への代替行為と考えられます。従って、それが何であるかがわかれば解決します。医学的な対応だけで治そうとするのは無理があります。拒食症の治療には愛を注ぐことが最もよい処方箋と言えます。その愛の欠乏こそが拒食症の目的だからです。緩慢な自殺が拒食症であり、それを止めるのは愛しかないのです

---